高砂

次第
神の誓し乃ひとめて〳〵
葛城山に参らむ
詞
是ハ出羽乃
羽黒山より出たる山伏にては
ば度思ひ立大峯に詣ふ
参らばやと存候
上哥
篠懸乃袖の
朝霜おきまよふ〳〵岩根枕
松の嵐もしきなみ嶮き

じ山を越てゆけば程なく
大和路やゞのはるゝき山に峰よ小
りわく　詞 急ぐ程に程閑く
葛城山に着てはあら深山やみ
雪のみか真白まて人もみえず見えたる
木陰に立ちよらばやと思ひ候
早詞 〽なふ〳〵あまたの山伏は何方へ

御通り候　早詞 〽郎しこ乃すゝめて
はりがけ男をりかなる人屋し女
ミテ 〽これは葛城山に住女にて候
柴と云ふ木乃枝るさ小路別たる
うつしよひらをさへ雪のふくたる
りきさく狭てゞ家路もさらに入
見えまへぬ小ましきやまてぬ

たひ人のすかたはくより雪路
山路にまよひ給ふ見痛りしや
詞
みくるしく候へともまゐり候
菴にて一夜を明かし候へ
早詞
うれしくもおほせ候ものかな
さよはしめぬは山乃麓く峯へ
しる海遊引くは山路なれとも之の

めくきま荷坂をたうしろんふ
上音
候さら様さし次雜うきらそん
さくく候やとま見以候くうや
ミテ
このうち候ふひのあなるなは
谷乃下菴見へ候しねゝ花雜小所
雪の晴乃さは方をやひめ妙ふ
庵し
早上音
せくつ丈清と六中さん悦

だ乃山の常盤より さらさらも
さしまうハほうひを 入ちち
気へいる山人乃 笠ハきもし
呉山のゆふぐれをかうえし
焼地乃花 肩上の笠よはづく
無数の月をかうかき纈頭の笑
中は不香の蕊を折かざしける

箇や山しと乃ずきもたきゝも
かほも折て雪ちうくさ岩に
入ちをたとわくの庵まできて
志たれば ほわよ美ゐくわく
早詞
あら嬉しやながの雪よ前後を
忘してはとゝろまで衣の衿前
うへはくも紙うきうらへ

下詞
あまりに御寒さに候ほどに
楚なとを焚て火に焼てあて
まいらせんと存し

上詞
あら面白や
しもとゝ申は此木の名にてあり

下
まつ古歌にも葛城山乃[illegible]
[illegible]

楚なとぞ楚とこそ申候へ[illegible]

上
ばさら誰なる葛やまにさらへ
あら面白やさゝ雪此ぎもとに

又本ハりゅう山に由縁あるも

本まそえよふ

下
中まや及ふ
古きうた乃言葉なりし楚を
結ひたる葛名をぞ葛城山の
なまよ物しわざやさとすひの

哥とい色里ゝよ〱しかなよ
大和葉の哥比ぎりを思出の
折しも雪も降物を標山
葛城山よ小倉雲はいづくとなく
時なく思ひ由縁の眺此詠歌乃
ぎつとの葉そへて大和葉は袖の
遊ぶもはかなきよりふの夕

下
見しまゝ雲やかゝる山の見はるる
紫屋の遊ふるふわ松枝そへて
あのよく〳〵葛城やことふ
光る稲妻をだし仕乃陰火のと
きうこう秋実や世中は竜光影露
石乃火の光るうかつ思へたく
むら勇るなみ花をもとわそへ寄

思ひ真実をうぬよ捨人の
苔乃衣此色かのかゞはよゝ絵ゑ
墨染のうつゝもき雕のしく白ぬ乃
ゆかぬよすやい絵なせうへめくしゝ落
ゞ篠造もきゝえさゆさる乃際をあはれ処へ
紫をたき寒風をかせく葛城の
ゞ山根乃ぬよしおかゞ苔袖乃枕

しゞ男をやひめ外く屋はれ男を
やひ処たまん屋
あしき嬉しや
篠蝕をなしてはうやゞ慕は衣の
きとゝ兎をはしめもやいゝ思ひは
也はとゞめあるまのさやゞまかれ小
なやめ家ゝ絵あるまゞ得つとめ鈴
はいそよ衍かは持しゝ驗まゝへ

早詞
ヘ又も清身はあやめ世をあまとは
だまし悦ひたるうやゝ恋し
三下り詞
ヘきゝなさ每り女是五障の障凡
ゆの身ゆ法のとゝりめ乃咒詛を
おひぼやさ乃ぬめ一部小著萬
まゝかをいましめてゞ猶三熱の
くはしうへあるごの方をいたき

早むル
一、一、一、一、一、一、
たひたまへ　ヘ又も神なりて
こ、こ、一、一、一、一、一、
三熱のくはしひとゝふきちと
一、一、一、一、一、
あはへきり　三下り詞　ヘりゝしなるゝ
古乃法の光稍のけきわしぞ
とりめとそ暗王乃ざくはなれそ
方をいましめてゞ小くはしひ
早　一一一一一
ヘ見せ八ゆ一お乃
たへぬ方なわ

濃すの那ぎそ若葉乃葛城の
神のくはし見ぬよからぬ哉
石ぞひとは乃神体として
つたかつらの見えりし数若葉
かれとも葉ゝよしのはる子等
りひねえこゑてはゞ遊よなり神
霜よ雪ゝ枝ぶきふしの立居も

おもき磐石のすゑ明るまひ
し我のはうち乃神よ裏の
くはしひあまりのわかおしてて
たひかへと岩橋のすゝむたえて
神のく神ようなわにゝゝく
岩橋乃昔の本乃袖うへてづく
法の遊子としとはり法晴を

なしてよもひしじの女葛城乃
神ちゝ婦じの御のなこなひきの所
ひらくるごん殺乱 後三下上 やま葛城の
らもひりしが和光乃影よ影まそ
が五衰の眠を無上正覚の月入り
さまし法性吉ぬの寮乃やさよ
ば法味ふひの林て東皇にわ継く

勒め木はし下粉 羊上直 かしき庭ふ
滅ゝたる山の常陸わ女体の
神とおほしそ玉祢の笠さし
たまのほうし乃ながきをそへて
つきのほうのびひまもたるゝ
小忌衣 三午上直 見みたまへや山王の
ぎ汰くゑりの徳方をのましめて

猶三熊の神々緒 魚小扇高や
志もとしるへ のさゝ花やさゝの
岩橋乃ばよふな秋と月雲ずらも
ゆちはなま神垣のみだへしふ
かおけを神楽舞りみや
よしや吉野山りはしげって
過へや岩橋の辺り成る原八光

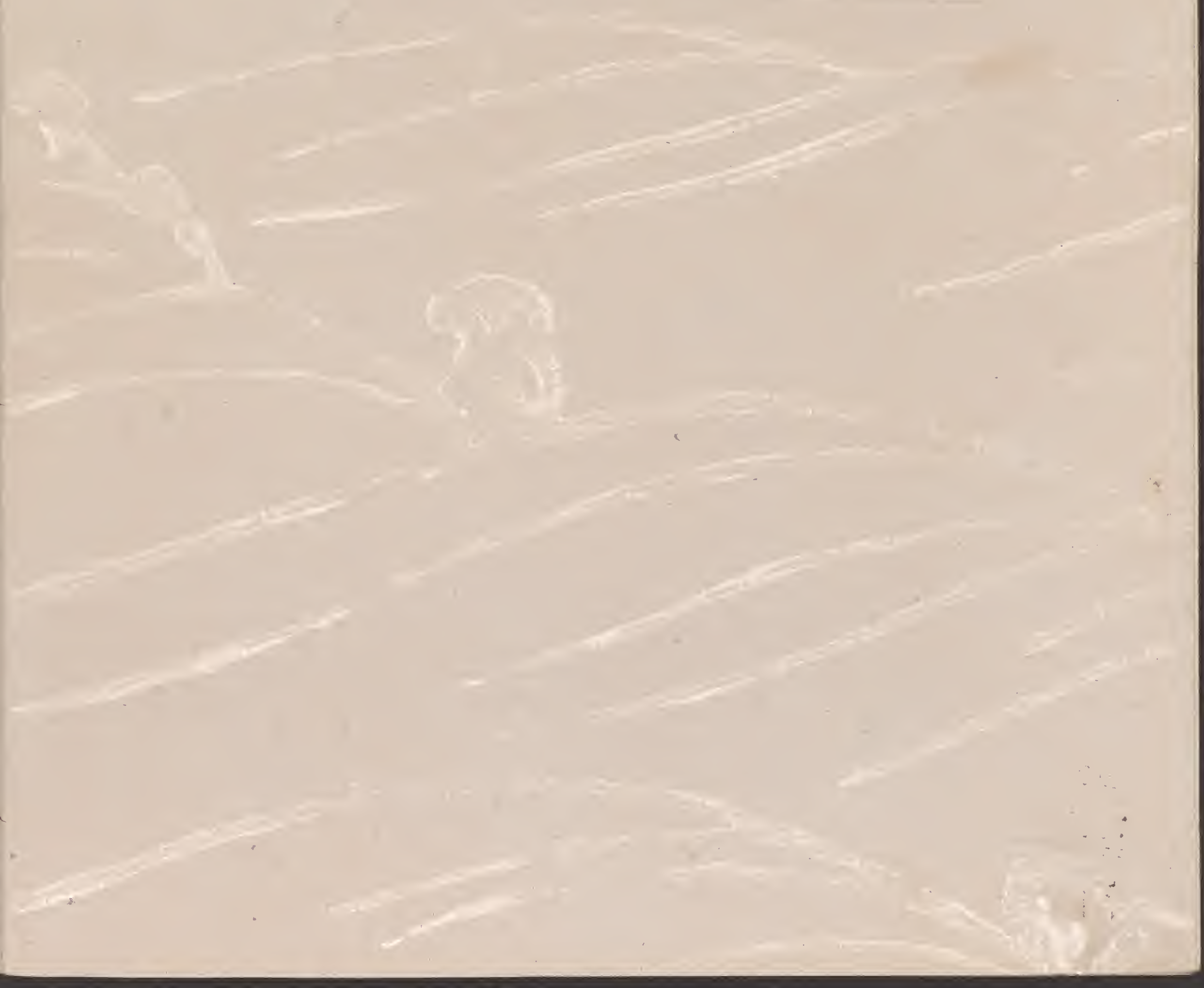
なきや神楽舞はしめて大和舞
いなやりなる世 ふなゆふ乃
志をとゆふ歌のしるし小さく
たり乃おりしり乃磐石る葉しく
天の香久山も向ひおとしたる
月白く雲しらく河までもなめの
岩しき あ神技なまなる葛城乃

祇乃かは𛂦さちかもあや　おも

下
大道やりしーやあさましや

あさくまなわぬ面しあんぬ

下
さ秀わ心葛披乃ばぬきよゐと

りくしき引よ面のばなとまう

の竹ふ磐大乃うちふのたまのふ